
一番好きでした

ひずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一番好きでした

【コード】

N7701Y

【作者名】

ひずる

【あらすじ】

想いを伝えられないまま、大切な人がいなくなってしまうたら、あなたはごうしますか？

(前書き)

ふと思いついて書いたお話です。

悲しい話なので、しんみりした気持ちになりたくない方は、回れ右してください。

信濃瑞希しなの みずきがいなくなる。

そう知ったとき、私は何もできなかった。
瑞希がいなくなるなんてありえないとすら思っていた。

「俺、アメリカに行くんだ。英語の勉強してさ、いつか大きな会社とか作っちゃって、大金持ちになるかもな！」

そう言って笑ってくれた顔が昨日のように思い出せる。
でも、瑞希はもういない。そう、本当は「いなくなった」のだ。

飛行機が落ちたのは、日本時間の真夜中。
ハワイ上空での空中分解、原因は不明です。
生存者はいない模様です。現在、機内に日本人がいたことについて確認が取られていますか…

アナウンサーの声が、耳を素通りした。
確認なんかしなくても、私は知っていた。
待ちわびていた帰国。彼が乗ってくる予定の便。

この日をどれほど楽しみにしていたか、言葉になんかできない。

本当は信じたくない。

信濃瑞希がいなくなつた。

信濃瑞希はもういない。

幼稚園の時、今では考えられないくらいやんちゃだった私の後に

続いてジャンブルジムのてっぺんを制覇した彼。

小学校の時、リレーのアンカーをしていた彼。

こけたけど、バカにしたけど、本当はかつこよかった。

中学生の時、野球部に入ってやめて、バスケットボール部に入ってやめて、何をしたかったか分からないけど、一生懸命だった彼。

高校生一年の時、赤点を取りつつもギリギリ留年を免れた彼。

思い出せばきりがない。

でも、もう瑞希はいない。

もっと言いたいことがあった。

もっと伝えたいことがあった。

置いていってほしくなかった。

話があるって言ってたじゃない。

私だって言いたかった。

本当の気持ち、隠していたから。

木でできた棺は思ったよりも暖かみがあつて、私は少し安心した。

この中なら、きつと安らかに旅立てるのだろう。

さようならは言いたくないから、最後にこの気持ちだけでも聴いてください。

瑞希、いつも、一緒にいてくれてありがとう。

不器用な優しさが、本当はととても嬉しかったなんて、知らなかったでしょう？

あなたがいたから、私は前に進めた。

瑞希がいてくれてよかった。

瑞希に会えてよかった。

誰よりもそう思ってる。

…会いたいよ。

でも、もう会えないんだね。

いつか私がそこに行くまで、待っていてください。
私は瑞希のこと、絶対に忘れない。

あなたが、一番好きでした。

(後書き)

さみしすぎる妄想にお付き合いいただき、ありがとうございました！
私ならもっと後悔してる自信あります！

(自慢にならない！…)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7701y/>

一番好きでした

2011年11月22日23時51分発行